

様式1 令和4年度 山梨県立ろう学校評価実施報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	幼児児童生徒のたくましく生きる力と豊かな言語力を育む ○一人一人の特性に応じた適切な指導及び必要な支援の充実を図る ○自身の力を発揮し、自分が自分らしく生きる力を育成する ○物事に対し、周囲の人とともに取り組む力を育成する
-----------	--

本年度の重点目標	1. あらゆる教育活動の場に発達段階に応じたコミュニケーション活動を位置づけ、豊かな人間性を育み、言語力・コミュニケーション力の向上を図る。 2. 個々に応じた合理的配慮によって、わかりやすい授業を実践し、学力の向上を図る。 3. 心の教育・キャリア教育を充実し、社会的自立に必要な能力や態度を育成する。 4. 家庭・地域等との連携及び聴覚障害教育のセンター的機能の充実を図る。 5. 安心・安全な学校づくり。
----------	---

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

山梨県立ろう学校校長 木村 則夫

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自己評価			
本年度の重点目標		年度末評価(令和5年2月20日現在)	
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
1	・6技能(見る、聴く、読む、書く、発表する、対話的なやり取り)を高め、豊かな表現ができるようになる。 ・個々の実態に応じた多様なコミュニケーション手段を活用し、状況に応じてコミュニケーション手段を選択できる力を育成する。	・聴能研修や手話・発音研修など聴覚障害に関する研修会を実施する。 ・補聴器・集団補聴システムを有効に活用する。 ・ICTを活用し、情報活用能力の育成及び「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善を行う。	・研修の実施状況 ・聴覚管理の状況 ・聴能機器の使用状況 ・手話研修会やSTを活用した難聴研修会等を実施し、教員の専門性を高めることができた。個々の実態に応じて補聴器・集団補聴システムを活用できた。 ・コロナ禍の中、感染対策をしっかり行い、コミュニケーションの機会をできる限り作ることに努め、昨年よりも交流及び共同学習を多く実施することができた。
2	・ろう学校の専門性を生かしながら、授業力の向上を図る。 ・聴覚障害に係る専門性の維持・向上のため、計画的な研修及び授業研究を図る。 ・ICTの効果的な活用を図る。	・相互授業参観を設定し、お互いに授業を見合いながら、専門性を高める。 ・授業研究会を実施し、「主体的・対話的で深い学び」の視点等から授業づくりの専門性を高める。 ・ICTを活用し、情報活用能力の育成及び「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善を行う。	・校内研究会や指導主事訪問の機会を利用し相互の授業参観を行い、専門性の向上につなげることができた。 ・今年度は本校主催の関東地区聾教育研究会に向けて「豊かな心と言語力を育む～『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指して～」を全体テーマに研究を行い、成果を得ることができた。 ・授業におけるICT機器の活用に向け、全職員が1人1授業でICT機器を活用した授業を行い、その成果を提出し、授業改善に取り組むことができた。しかし、まだ取り組み始めたところであり、これから研究を重ねて行く必要がある。
3	・幼児児童生徒が興味関心を持ってかかわろうとする気持ち、取り組もうとする気持ちや、疑問を持って解決を見出そうとする気持ちなど、「豊かな心」を育む授業を行う。 ・職業実習・地域活動を通じて、障害者理解を進めるとともに、就労支援や一般就労の拡大を図る。	・各教科等において、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を考え、PDCAサイクルでの授業改善を行う。 ・キャリア・パスポートを活用し、継続したキャリア教育を推進する。 ・働くことに関する学習を充実させ、自己肯定感・有用感を持たせる。	・観点別評価 ・関東地区聾教育研究会の全体テーマ「豊かな心と言語力を育む～『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指して～」の中でPDCAサイクルについても検証を行い、成果を得ることができた。 ・キャリア・パスポートを作成し、1年ごとに振り返りながら、自己を見つめる学習を行うことができた。 ・インターンシップ等の職場体験を通じて、企業・事業所での聴覚障害に対する理解と合理的配慮が進んできている。 ・教職員用の学校評価で進路に関する項目において、「3:どちらとも言えない」の回答数が目立った。
4	・保護者、地域における関係機関との連携・協働を図り、開かれた学校づくりに努める。	・コーディネーター会議を中心とし、より充実した支援やコーディネートのあり方について工夫、改善し、活動の周知と連携の強化を図る。 ・医療・行政・教育・福祉等の外部機関との連携を強化推進する。	・コーディネーター会議の活用、専門家との連携・活用、資質向上のための研修及び遠流 ・コーディネーター会議を通じ、全校幼児生や通級による指導を受ける児生の情報について共通理解を図り、より良い支援へとつなげることができた。 ・医療機関や福祉事業所、市町村の福祉担当などと連携しながら、専門機関への相談や専門家からの助言等も活用することで本校並びに外部の幼児生の個々の特性に合わせた指導を行うことができた。
5	・災害発生時に自分の身を守る行動がとれるよう防災教育や避難訓練を計画的に実施する。危機管理マニュアルを見直す。また、感染症等の予防及びまん延防止対策の徹底を図る。	・様々な場面の避難訓練を行い、自らどうすればよいかを子ども自身に考えさせる場面を設定する。 ・危機管理マニュアルを絶えず検討する。	・防災教育、避難訓練の計画・実施・振り返り ・今年度も火災・地震を想定した避難訓練に加えて、洪水浸水を想定した訓練を実施した。その際、引き渡し訓練も同時に実施しより実践的な訓練を実施することができた。引き渡し訓練ではドライブスルー方式で行った。また、デジタルサイネージの活用も試みた。

学校関係者評価	
実施日(令和5年3月3日)	
評価	意見・要望等
4	・コロナ禍において非常に工夫した取り組みを行っている。規制が緩和されていく中では特に「交流」に重点をおいてもらいたい。 ・聴覚障害のみの生徒に対しては達成できているように思える。重複児にはより本人に合った方法を早期に見つけていただき、高等部卒業までには身に付けられるようお願いしたい。 ・1対1授業でわかるように工夫していると思う。コミュニケーションもいろいろな方法で行われている。(手話は大切なので) ・この項目に関して保護者や生徒は本校ならできて当たり前と思いがちです。障害への対応、学力、言語力(コミュニケーション能力)などその期待に応える教職員の皆様には頭が下がります。このような多様な知識と技能を必要とする学校は他にあるのでしょうか。それをやり遂げている皆様は自信を持って勤務してほしいと願います。※2.3も同様 ・卒業生は学校教育で力をつけています。それを卒業後に定着、発展させるか今後のカギとなると感じます。 ・コミュニケーションのための言語、学習のための言語をどのような手段で高めていくのか、具体的な記述がある方がよい。 ・個々の実態に応じたコミュニケーション手段についても、一人ひとり異なるが、本人自身がどう捉えているのか、その点についても評価する必要があると考える。
3	・専門性を生かすためにもより積極的にICTを活用したい。教育の場でICTをツールとして利用することで子供達の選択が増えていく。 ・ICTは必要不可欠になってきているため、効率よく、全ての児童生徒に適切にご指導いただければと思います。 ・本校の教育力、専門性を地域にさらに還元していただきたい。教科指導や専門性の高い教職員の能力を既存の還元方法とは違ったスタイルで展開できると考えます。地域に開かれた課外授業(中・高)、夏休み勉強会(宿題や感想文など)、PC教室、図書館の開放、アウトドア講座などいろいろ考えられるのではないのでしょうか。地域ニーズへ対応したもので。※4も同様 ・開塾研での成果の継続と課題の整理にしっかり取り組んで教育に生かしてください。 ・ろう教育、聴覚障害教育の専門性を継続的に高めるためには、教員一人ひとりの研鑽が必要であること、また異動に伴う専門性の継承や育成をどのように行っていくのか、継続的な課題である。 ・今後はこれまでの教育の専門性を継承しながらも、ICTを活用した教育や新たな支援技術の活用にも焦点を当てて取り組んでいく必要があると考える。
3	・社会においては他者とのように関わっていくのかを考えねばならない。個の力をつけながら集団の中で自分がどうすべきかを考えさせる機会をできるだけ増やしていくべきである。 ・キャリア教育を幼児期から意識し、働くこと、生きること、奉仕する心などを身につけるとともに、具体的な「スキル」を取り入れたカリキュラムを期待します。 ・ICT活用授業や高等部生のBYOD等新しいことを取り入れながらの教育実践はご苦労もあるでしょうが、専門家の方も活用して更に推進されることを期待します。 ・各学部同士が時にかかわり合うことで、お互いに刺激しあうこともよい。就労支援では特に力を入れて、本人には就労をするためには何が必要かを意識していただければと思います。 ・実習体験は大切である。なかなか通じないこと、卒業後の理解しにくい部分、苦しみもあることなどを分かってもらいたい。 ・生徒の多様な進路希望に対応し、学部を超えた学習や指導が展開されている事は素晴らしいと思います。今後、学びや働き方のスタイルも多様になっていきます。いかにして新たな進路先、就職先に児童生徒の力を伝えていくか、そして力を伸ばすための環境をいかに構築できるかは本校の役割と考えます。既存の進路先から、さらに生徒の特性や可能性を考慮し多様な働き方に合わせた進路開拓も必要かと考えます。 ・障害理解は必要不可欠。今後は聴覚障害を強みと捉え「生かす」に転換できるような取り組みに期待します。 ・在籍人数が少ないなかで、創意工夫を行いながら取り組まれている。 ・今後は感染予防対策の緩和から、交流等は行いやすくなると考えられるが、対面形式に限らない様々な方法を駆使して伝える力の育成や、障害理解、進学・就労の拡大を図ってほしい。
4	・多くの機関と連携を取っており、子供たちの成長する姿がうかがえる。行事を増やすのではなく、より内容の充実を意識することが大事である。 ・交流活動が目的ではなく、手段として実際に幼児児童生徒の「生きる力」の習得につながるように工夫していただきたいです。 ・開塾研の定例研はお疲れ様でした。苦労された分だけ成果があったと思いますので、今後、教職員の入れ替えがあっても、成果を生かしていけることを期待します。 ・コロナ禍なりに模索していただいたと評価します。今後は緩和により、より開かれた学校として発展していただければと思います。 ・運動会に地域の方々と一緒にありますね。 ・情報交換をして、保護者の方には文書でお伝えするとよい。 ・本校のセンター的機能は数多くの実績をあげ、必然的に支援内容も年々多様化していると感じます。人というハードと支援というソフトには限界があります。専門性への対応と同様に途切れない支援が展開できるよう工夫が必要と考えます。※2を参照してください ・小児難聴ネットワークにおける医療・行政・教育の連携、保護者の学習会のための動画配信など、積極的に行われている。 ・コーディネーターの会議ではプロセスについての共有がまだなされていないとのこと、今後の工夫が期待される。
4	・新たな試みも行われており、検証を踏まえながらより実践的な危機管理を構築していく。 ・防災教育、防犯教育など命に関わることに伴って、継続し、さらに発展した活動をお願いします。 ・常に意識してくださっているとします。引き続きしっかりと行動できるよう指導願います。 ・しっかりとマニュアルとそれに即した訓練、その見直しのサイクルができていくことは素晴らしいと感じました。 ・訓練は必要不可欠です。確実にバニク状態が予想できる経験したことのないような南海トラフ地震などの災害にどのように学校として対応し、地域と連携していくか最悪の状況でシミュレーションしていく必要を感じます。 ・感染症対策や学校が行った実践は応用できると考えます。 ・学校での災害時における行動だけでなく、一人で行動している時、外出先、など様々な場面における一人ひとりの危機管理マニュアルが期待される。昨今、学校内侵入者への対応についても求められているため、様々な場面を想定した見直しが必要なのかもしれない。

※重点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。  
 (2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的な対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日は、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。